



AMASC あれこれ

発刊にあたって



JASH会長

三田千世

世界聖心同窓会第8回大会が東京聖心大学で開催されてから早や7ヶ月も経ちました。予想外の大多数の参加者を得て、素晴らしいプログラムと、そのテーマ通りの「異文化間の交流」の一週間は、夢の様に過ぎ去りました。しかしその余韻は今でも全世界に残っております。聖心という家族が39ヶ国に居ることをひしひしと感じるこの頃でございます。

大会に来た人には、それぞれ楽しい憶い出と、「この世界を私共の強い連結で少しでもより人間的な、よりよい場所にしよう」との新たな決意を持って地球の各地に散って行きましたが、開催国日本では、その感激を少しなりとも全同窓生と分かち合いたいとの希望から、このエピソード集が生まれることとなりました。会議の一部始終は前アマスク執行部がすばらしい1冊にまとめて下さいました。ご覧になりたい方は、各同窓会にお申し出下さいませ。そしてこの小冊子はおもてなし参加者が経験した面白いこと、劇的

なこと、又失敗したこと等の記録でございます。これを通してあの時の雰囲気、感動が残され、伝えられますことを心から願っております。

第8回アマスク大会は、日本中の2万人余りの同窓生方が、1つとなって協力して下さいましたおかげで大成功を収めました。たくさんの方々の多くの時間、才能、そして気持の御奉仕のおかげでございました。そのチームワークと、細かい所まで届いた心くばり、又抜群の組織には、遠来からのお客様方が一様に感嘆されました。皆々様に厚く御礼申し上げます。

この催しは10の同窓会が一致団結する大きな機会でございます。ただ今、日本の中の10の輪は互いに固く結び合い、世界に向って大きな力となって動き出しました。この融和の精神がますます広がり、楽しく、意義ある日本聖心同窓会が末長く発展して参ります様祈っております。
(みこころ会38回)



前AMASC会長
小堀 玲子

20数年前 JASH の組織づくりが AMASC の活動の一環として求められた時、時期尚早という声が日本の諸同窓会の中で聞こえたように伺っております。その時に、マザーブリット始めシスター方が、20年後の世界は確実に国際化すること、アマスクも日本に本部が置かれるようになるだろうと予見されたのを鮮やかに憶えております。そのマザーブリットも、アマスク東京大会のためこれほどの家族的なつながりの中で、涙と笑いの数ヶ月を聖心の仲間たちがすごし、又それを支える無数の輪が母校で与えられた自分自身の信念のためというただ1つのことの為に拡がるとは想像なさらなかったでしょう。

大学キャンパスから潮の引くように皆様が去って行かれた淋しさを、勤務の合間にかみしめている私といたしましては、悲喜こもごもの裏話を、ここにこういう形で保存なさろうという JASH の企画に心から感謝申上げる次第でございます。又御一緒に何が出来るかをいつも憶いつ、
(宮代会 8 回)



AMASC 準備委員長
須賀 敦子

アマスク世界大会がおわって、もう半年になるのだけれど、たった昨日のこのようにも思えるし、ずっと遠いこのように思える。世界から集まってくれた、懐かしい何人かの顔にも、大会中はなにかゆっくり話すひまもなく、またみな遠い国々に帰って行ってしまった。

1978年のダブリン大会のとき、次期の大会を日本へと招待したときは、大体の空気はそんな遠い地の果てのようなところには、とても行けないといった、はっきり言って冷たいものであった。それが4年後のサンフランシスコでは、次回は日本でという提案が、もちろん会長国ということもあって、わりあいすんなりと受け入れられた。1982年から今年までの、欧米諸国における日本への興味は、おどろくばかりの変化で、最後になって申込が殺到した。

すべてが終わった今、たのしかったという思いが、ひとりでも多くの参加者の心の底に残っていれば、それが大会の最大の収穫だったと、思う。(宮代会 1 回)



AMASC東京大会とは どんなものだったのでしょうか。

高校生から70余歳の方まで、史上空前の千余名の参加によるアマスク東京大会から7ヶ月が経ちました。日本の同窓生の意識の敷居の内にはまだ、大なり小なり「大会」が存在していると思います。

ここに、大会前や大会期間中、あるいはその後の出来事やエピソードを、多くの方から寄せられたお便りやお話を織り混ぜて、大会プログラムと共に御紹介して参りたいと思います。

3月16日(日)

13:00 マリアンホール1階
 18:00 大学聖堂
 19:00 大学食堂

*理事会

参加登録、資料等配布。アマスクプラザ設置
 開会ミサ・イエズス会ドイル師司式
 レセプション

大会初日。(事実上、大会プログラムは前日までの日本人参加登録に始まりましたが)各種質問にお答えするインフォメーションデスクや、登録会場にあてられた大学パーラーには、参加24ヶ国に及ぶ出席メンバーの為の

言語別登録受付テーブルが配置され、名簿の載ったそのテーブルの向こう側には、英語、仏語、伊語、西語の堪能な日本人メンバーがそれぞれ待ち構え、そこは活気と緊張とそして出帆の喜びとに満ちていました。また用意されていた大型バスで外国人メンバーが次々到着し始めると、たちまち会場は国を越え年齢を起えた、国際間の集い独特の熱気のあるものとなりました。

外国人メンバーは、名札の名前、会費払込等の確認を受けてから、大会資料の入った東京大会のオリジナルトートバッグを手渡されていました。



●開会ミサ(ドイル師司式)



♡名札確認の際の話です。横9センチ×縦6センチの大きさの紙の中に横文字を綴ると、長い名前は どうやっても書ききれません。特にラテン系の方の名前は長いので、名札係はやむを得ず一部省略して書いたりしました。ところが、省略していい箇所がお国によって様々で、何人かの方から指摘を受けたのです。某メキシコ夫人からは、由緒ある名前を省かれては困ると申し出があり、結局御本人のおっしゃる通りに苗字を五つ位並べて書きました。

夜には、JASH主催のレセプションが、レストラン「かをり」の御配慮も得て、大学食堂に準備されました。750名分、10種類のお料理が、みごとな氷の彫刻や花々に飾られて、所狭しと配置されていました。再会を喜ぶ方、自己紹介をなさる方と、皆それぞれで、美しいフランス語、少し耳慣れた英語、何とも活気のみなざるスペイン語と何ヶ国語かが飛び交う食堂には、BGMはいりませんでした。さながら、言葉が蒸気になって、大会初日の夜を丸く包んでいるようでした。

尚、この日からの外国人メンバーの東京での宿泊先としては、都ホテル東京(約500名)、大学学寮の西館1、2階(38名)、渋谷と白金の修院(18名)、その他大使館宿舎や友人宅(約15名)でありました。

3月17日(月)

9:00 マリアンホール
 12:30 大学食堂
 13:30 マリアンホール
 17:00
 18:00

◎総会

挨拶、議事・日程説明、役員及び役員候補者紹介等

昼食会(聖心女子大学主催)

◎各国活動報告

ミサ・カルメル会奥村師司式

Home Dinnerへ出発

大会2日目、総会が開かれました。

美智子妃殿下、三笠宮信子妃殿下の御出席のもと、小堀会長の悠々たる開会スピーチに、メンバー一同大きな拍手を送りました。又、美智子妃殿下の英語のスピーチに続き、参加各国の会長のスピーチが披露されると、いよいよ大会の車輪が回り始めたことが感じられました。尚、会場のマリアンホール2階には、同時通訳用ブースが設置され、ホールで行なわれたスピーチはすべて英・仏・西・日の4ヶ国語でそれぞれ聞くことが出来ました。



夜には「ホームディナー」が準備されていました。同窓生の家庭で夕食を共にしながら日本の家庭の雰囲気を実際に味わって頂くために、外国からの全参加者と同伴者をご招待しました。ホステス役を買って出て下さった日本人同窓生は66名、外国人ゲストは560名。一軒のお宅に最多40名から最少2名までで、お客様は皆それぞれおしゃれをして訪ねられました。ホステスのアシスタントや車でのご送迎ドライバー、その車の到着誘導などで、約200名の同窓生がお手伝いをしました。



3月18日(火)

9:30 マリアンホール
 11:00 大学教室
 12:00 大学教室
 13:00
 15:00 ソフィアバラホール
 18:00 大学食堂

*各国会長朝食会

◎基調講演・上智大学教授緒方貞子氏

◎研究テーマ発表

昼食

グループディスカッション①

バス出発(聖心女子学院へ)

ミサ・イエズス会ネブレダ師司式

お茶

ヤングメンバー(25歳以下)の会合

大会3日目。緒方貞子教授による基調講演がありました。講演はすべて英語で行われましたが、仏語、西語、日本語への同時通訳ができました。講演後、外国人メンバーからは是非コピーがほしいという声上がり、係の方々がその用意に嬉しい汗を流していらっしゃいました。



この日からグループディスカッションが始まりました。出席者は、各討論テーマによって言語別に六つのグループに分かれ、それぞれのグループリーダーの進行のもと、熱心な討論が続けられました。この日に向けての百人程のスタディーグループの方々の猛烈な勉強ぶりは、筆舌に尽し難いものがありました。



この日、外国メンバーは三光町聖心を訪問しました。白金修院、みこころ会、三光会がミサとお茶の準備をして下さいました。外国人メンバーと合わせて600人が、ソフィアバラホールでのミサを終えたあと、専修学校のアッセンブリーホールと本館職員食堂を会場として、和菓子、手作りケーキ、寄付のクッキー、果物、お花などが色彩りをそえた中で和気あいあいと交歓する様に、大会3日目のメンバー同志の気持ちのゆとりをかいま見ることができました。



3月19日(水)

9:00 マリアンホール
10:30

12:00 大学食堂
13:00 大学教室
15:45 マリアンホール
18:30 都ホテル東京

大会4日目は、浜尾文郎司教様とクラーク上智大教授による講演がありました。講演のすばらしさもさることながら、同時通訳のイヤホンを耳に、しっかりメモをとる外国人メンバーの後ろ姿にも、大会の意義を感じることが出来ました。

〈講演の内容は、緒方貞子さんの講演内容と共にJASHに記録がありますので、御希望の方は御連絡下さい。〉



夜、都ホテル東京で、「お国自慢の夕べ」が開かれました。各国の料理がメインテーブルに並べられ、周りには屋台式にして日本食が配されました。また、小林みこころ会小西静子さんの御寄付による白雪四斗樽を、参加歴代会長四名が鏡開きしてアマスクマーク入りの柀で乾杯する頃は、会場全体が熱気を帯び、各国お国振りを発揮して、歌や踊りを披露するなど、激しく賑やかな夕べとなりました。たとえば、スペインの若いメンバー達は、美しいフラメンコの衣装をつけて、持参したカセットの音楽に合わせて踊り、皆を楽しませてくれました。実にその陽気さは、イベリアの燃える太陽の如く会場を熱し、その迫力は、



ミサ・イエズス会ルーメル師司式
◎講演(討論テーマ) 横浜教区 浜尾文郎司教
上智大学
グレゴリー・クラーク教授

昼食
グループディスカッション②
◎ディスカッションまとめの発表
お国自慢の夕べ



会場にいたホテルマンの体をすらすら、ついゆすらせた程のものでした。

私達日本のメンバーは、和服を着た小堀会長を先頭に、炭抗節等で踊りの輪を広げました。ちなみに、大会前まで八面六臂の活動をしていらした諸先輩方が、美しく和服を着て接待なさる姿には、改めて、誇りと尊敬の念を抱かずにはられませんでした。



3月20日(木)

9:00
14:00 カテドラル都内観光へ出発(外国同窓会会員)
ミサ・白柳東京大司教, 内山師, 岩橋師司式

この日は朝から浅草寺から始まる都内観光です。移動の都合上、係の日本人以外は皆外国人に限りまし。しかし、550名以上の外国人が13台のバスでツアーをするのですから、迷子や遅刻者が出て当然と思われましたが、時間厳守が苦手とされるスペイン語グループ(スペイン・コロンビア・ペルー・メキシコ等)160名も1人として落ちこぼれなく、スペイン語のガイドさんは、「今まで扱った中で、こんな事は初めて。皆さん教養が高いからかしら?」とびっくりしていました。これは事実でしょうか、偏見でしょうか。

♡座禅体験——1回(約170名)につき3人位、肩を木刀で叩かれる人を決めておいてほ

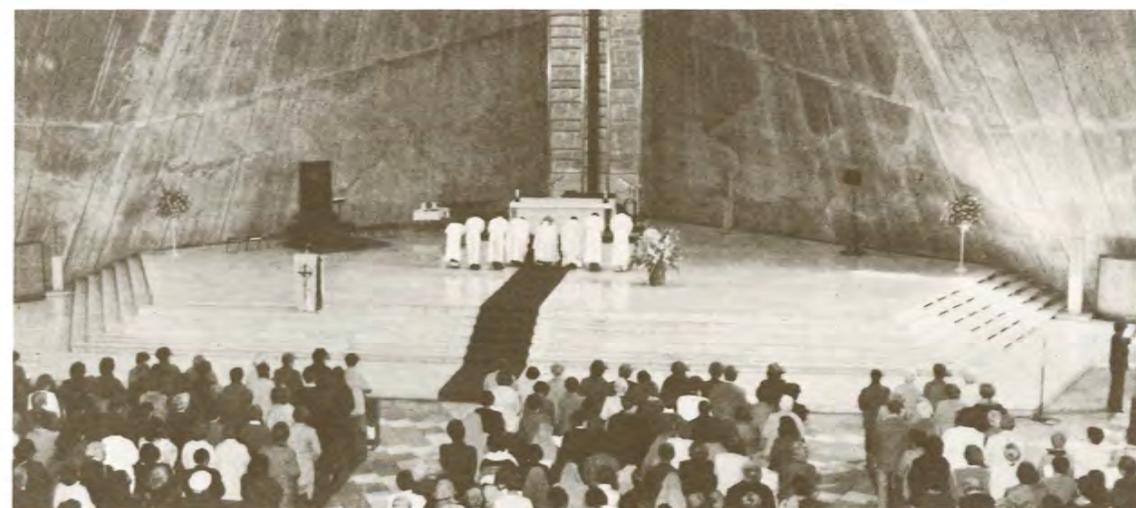


しいとお寺から要請がありました。以前、何も知らせず外国人を叩いたら、大変立腹して訴訟問題にまでなったとかで、それ以後外国人相手には大変神経を使っているとのことでした。手分けして事前をお願いして了承を取り、座禅の時に肩に黄色いカードを貼りつけていただき叩かれていました。「覚悟していたけれど、思ったより痛かった。」というのが多くの感想でしたが、真剣であるべき座禅中、ピシッと音がすると周囲からクスクスと笑い声があり、何とも締まらない楽しい座禅体験でした。



♡東宮御所へ——美智子妃殿下は、東宮御所に外国人メンバーを招いて下さいました。皆さん妃殿下とお話したく、鉄道のラッシュアワーのように、大混雑となりました。小堀会長やJASHの三田会長は、妃殿下の後ろに道を作るのに汗みどろになっていらっしゃいました。この後、広い庭園を通り抜けてバスの待つ駐車場まで、トランシーバーを持った東宮警察の先導で迷わないよう列を作って歩きました。

♡カテドラル——ここでのミサを白柳大司教様にお願ひし、大司教様の御意向「日本に於ける難民定住の促進」の為に、特別献金を集めました。世界中のメンバーの愛は、日本円にして約22万円にもなりました。



3月21日(金) (春分の日)

9:30 マリアンホール
 11:30 大学聖堂
 12:30 大学食堂
 14:00
 19:00 都ホテル東京

いよいよ大会最終日。マリアンホールでは総会が開かれ、大会テーマに関するまとめの発表がなされました。その内容は、英・仏・西の3ヶ国語でコピーもされ、外国メンバーの要望に答えることが出来ました。

またこの総会で、次期アマスク会長及びアドバイザー(4人)の選挙も行なわれました。会長にはコロンビアのベアトリス・サラザールさんが、またアドバイザーの一人には、日本の中山洋子さんが選ばれました。これによって日本は、AMASCの一員であると増々強

く意識し、誇りにも思うものです。中山さんの今後の御活躍を祈りつつ、JASHを挙げて応援して参りたいと思います。

4年後の1990年。会長国であるコロンビアの首都ボゴダで、第九回AMASC世界大会が開かれる予定です。また再び、多くのメンバーの出会いや再会のうちに、AMASCの本来の目的である「教会と社会と母校への奉仕」が一つおずつ実って行くことを期待したいと思います。

皆さん、ボゴダへ参りましょう!



*各国会長会合
 ◎総会
 会則改正票決、大会Resolution発表、役員選出等
 閉会ミサ・イエズス会山本師司式
 昼食
 *各国会長会合
 *新理事会
 お別れ夕食会

11時半。大学聖堂で、山本師司式による閉会ミサがありました。AMASC執行部の方々の4年に渡る緻密な国際活動を始め、「聖心」に学んだ数多くのメンバーの無償の奉仕や、周りの方々の厚い協力によって実を結んだこの大会を、心から神に感謝致しました。



小堀玲子前会長による
 Beatriz Salazar新会長の横顔



年令6?才

コロンビアの聖心の卒業50年を4人のクラスメートと祝ったばかり。

アマスク創成期から南米諸国の代表として深くかかわった。会長立候補3回目にして当選。これは世界特に欧州の眼がようやく南米に向けたことを意味する。

コロンビア聖心同窓会の中では、人気第一の絶対的存在。主都ボゴダの同窓会長兼コロンビア同窓会(JASHに当るUNASEと云うのがある)として、9つの地方同窓会をしばしば巡回し、若者にも大変人気がある。

一見豪放ライラクだが、ち密な配慮のある暖い人柄でシスター方とも親交が深い。

ヨーロッパ同窓会の活動家たちとは個人的には親交があるが、ものの見方はあく迄も第三世界を中心に協調路線をさぐっている。

コロンビアのボゴダ銀行を一族で経営。

前頭取の夫君との間に一男二女。

趣味でコーヒー園を経営するなど、幅広い人格。男性的なメロウな声の持主なのでアマスク大会の時には、カメラマンが、聖心同窓会にも男性がいるものと間違えたくらい。

その頃
パレスでは



「日本の文化を歴史にそって紹介する」目的で、1985年1月から準備を始め、写真パネルと美術工芸品を展示しました。

◎ 係の記 ◎

私は「日本紹介」に参加していたのですが、当初何を日本とし、何を紹介していいのやら五里霧中で、ただただパレスという純日本御殿がそこにあるという事実のみ先行していました。しかし実際には、皆様の御協力により日頃見ることの出来ない様な国宝を始め、立派な品が200点余も集まり、修復された御殿の美しさと相まって、心に残るものを催すことができました。



品物をお借りするといっても、損傷、焼失、盗難等一切何の保障もありません。それなのに、家宝をお出し下さった方も沢山ありました。お借りする方としては、その方々のひたむきな善意に酬いるためにも、品物が完全な姿でお返しすることにどれほど心と体をつかったことか。ちなみに私は前後10日間で3キロ痩せ、効果的なダイエットにもなりました。パレスは見事に昔の縁を漂わせた会場とな



り「日本紹介」冥利に尽きたのですが、その完成引き渡しが、開会の前日でした。その上前夜からの雪で、あの寒々としたパレスで用意するのは、それこそ十二単衣でも着ていない限り凍えてしまうと思っていましたら、何と畳の下が床暖房になっていて、その気持ちの良いこと！係一同ベッタリと畳にすわり、青畳の香と、ホワーと何とも云えない暖さを満喫しました。これが一番の役得だったかもしれません。

お借りした品のエピソードと云えば、お雛様の杓や五人囃子の楽器が無いものがありました。手持ちぶさたのお雛様はやっぱり様にならないので、器用な係の方が紙や楊枝でまるで本物のように作り、持ち主に大いに喜ばれました。又、こんなこともありました。木彫のすばらしい鎌倉時代の仏像をお貸し下さ

った方がいるのですが、お品がお品のため、家の方に内緒でお仏壇から出して来て下さったのです。ところがお彼岸に家にお坊様が見え、家族の方が集まられることになり、急ぎその仏様は会期中にお帰りにになりました。

外国人の反応はと云えば、「ここは常設の美術館か。」という質問が一番多く、成り行きを説明すると「私の国で同じようなことをやろうとしても、絶対にこんなに立派な物がこんなに沢山集まらない。」と口々におっしゃり、物心共に恵まれている日本の同窓生の寛大さを再認識していらっしゃったようです。「美術館では全てがケースに入っているけれど、ここではじかに見られるのですばらしい。英語で説明もついているし。」「私は4回見に来ました。日本の文化は本当にすばらしい。」と感極まって涙をうかべておっしゃる方もありま



した。図らずも、インターの先生方や生徒さん方にも「日本紹介」をさせていただいたのはうれしいことでした。

あの忙しさはもしや夢ではなかったかと思えるようになった今、かえっていろいろなエピソードが思い出されます。一言付け加えたいことは、拝借した全ての品は何一つ粗相もなくお返しできたことです。これは係一同の生涯の誇りとなると思います。

(宮代会15回 松下延子)

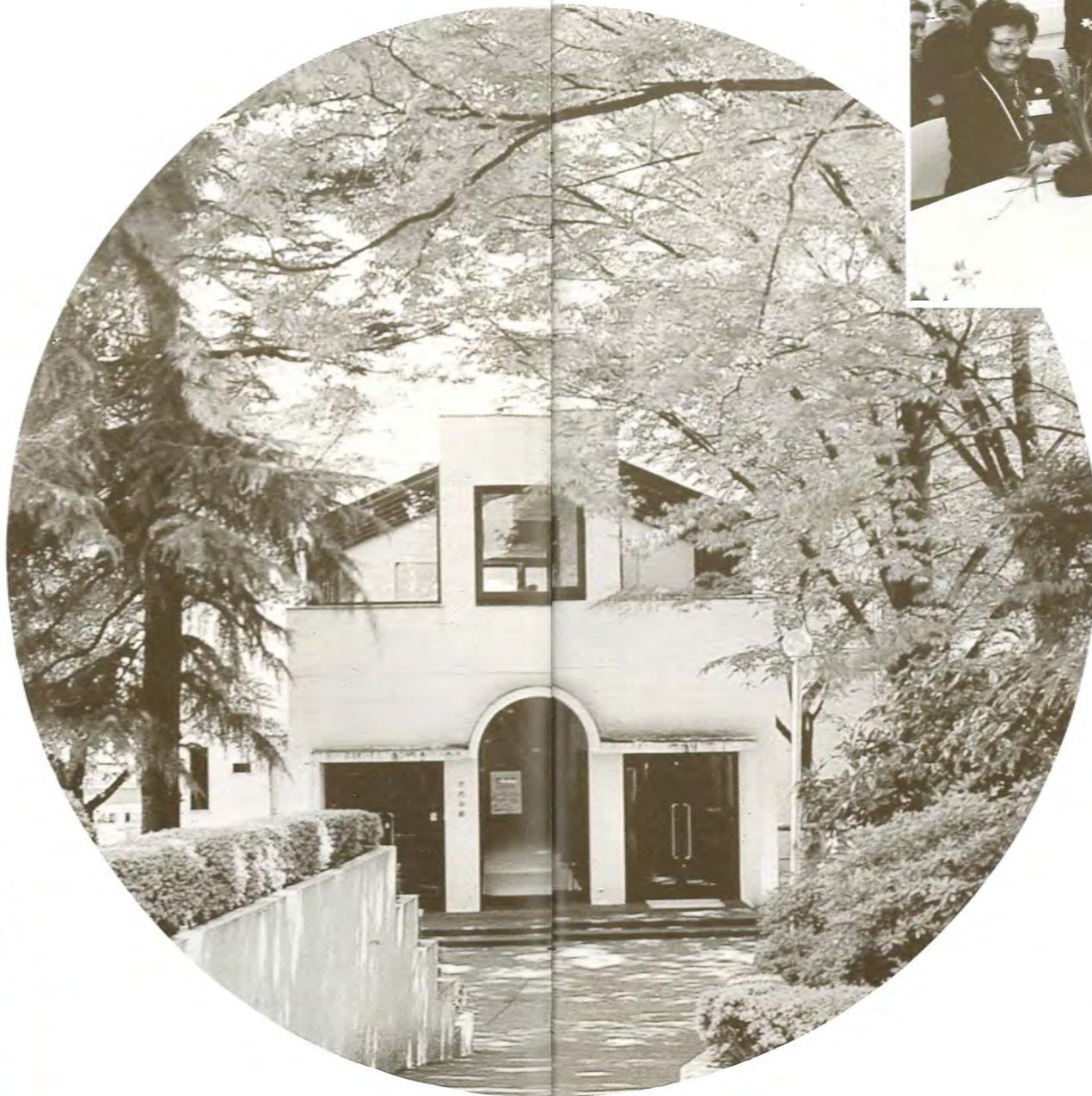
その頃
宮代会館では

宮代会館では、宮代会主催による日本紹介のデモンストレーションが行なわれました。

◎ 係の記 ◎

会期中都内観光の20日を除く毎日宮代会館全館を使って日本紹介のビデオ・フィルムの上映と、茶道・華道の実演を行ない、5日間で約400名の入場者があった。中には華道は日ごとに流派が違っていると聞いて、日参した方もある。

大会のプログラムに合わせて、会館の正面には「Alumnae Hall」と大きく標示し、会館内部にも各階会場の案内を英語で書いて貼った。



入口のある3階のホールにはレンタルで借りた72インチのビデオスクリーンを置いて、外務省海外広報課から拝借したフィルムを常時上映した。フィルムは美術、工芸、自然、教育、最新技術など多種多様で、「日本紹介映画



ねばならず、急遽スペイン語のナレーション入りのを取り寄せたりもした。

2階の和室では茶道のデモンストレーション。会館でお稽古をしておられる表千家の山田宗保先生が、お弟子さん達と一緒になさってくださいましたが、先生は毎年宮代祭でお茶席を出しておられる経験を生かして、実に手際よく事を運んでくださったが、はじめて日本を訪れて茶道に触れる方へのこまやかな配慮が随所に見られ、きっとそのことが皆様を満足させ感激させたのだと思う。茶道については、お菓子を虎屋がご寄付下さったことを付記し、感謝を表わしたい。

4階では華道のデモンストレーション。日頃「Ikebana International」で活躍なさっておられる同窓生にご協力をお願いしたところ、これまたすぐに外国の方々を楽しませる企画を実現して下さり、同窓会がいかにか人材豊富であるかあらためて感心した次第である。

宮代会館全体に日本的雰囲気を出すため華道の方達には各会場はもとより、廊下やガラス戸越しに見える事務室にまで、腕を振って素晴らしいお花をいけていただいた。

(宮代会6回 吉武勇子)

の手引き」を作られた「外務省婦人のための会」のメンバーで、内容を知り尽くしておられた同窓生をお願いしてそれぞれの日のプログラムを組んでいただいた。でもいざとなると御客様の好みに合わせて、臨機応変に対処せ

こちら、
アマスクプラザ。
開店中

参加各国のお国ぶりを示す品物を展示・即売し、売上の10%を東欧の援助に、との呼びかけにこたえて、18ヶ国が参加しました。会場となった大学マリアンホールブルーパーラーは、常時買物客で賑わっていました。日本の店は、卒業生からの寄付が二千点余に上り、日本円にして76万円程の売り上げになりました。

◎ 係の記 ◎

10数ヶ国のアラムネ達が持ち寄った各国特産のお土産を売るアマスクプラザは、ブルーパーラーで賑やかに行われました。何しろテーブルが限られて居た所へ予定のお申し込みより沢山の国々がお持ち下さり、1つのテ-



ブルを2ヶ国で仲良く分け合って頂いたりして、わあわあ言いながらと和気あいの毎日でした。

日本のアラムネの方達から御寄附頂いた2000点余の品々を次々と並べた私共の机の前は、連日特にごったがえして居りました。おかげ様で大盛況のうちに商品も殆んど売りつくし、私共一同ほっとして後片づけにばかり、都ホテルのお別れパーティー行の最終バスも間もなく出発するとの事で気が気でなく、出たゴミ屑をどんどん焼却炉に運んで居た時に大事件が起りました。ふと気がつく、売上げのお札を入れた私のハンドバックの側のコインが全部はいった紙袋が一瞬のうちに消えていたのです。ドキンとすると同時に気もそぞろに、二、三の方とゴミ捨場に走って行き

ましたが、時既に遅く小父さんが全部焼却炉に放り込んだ直後でした。最近据えつけたその焼却炉は、コインもどろどろに溶かしてしまうと聞かされ一同がっかり……。コインを数えて下さった方々が確か7,000円いくら位だったと思うけど、この頃は500円硬貨も多いし、もしかしたら70,000円かもと首をひねられ、一生懸命働いた一部を無駄に灰にしてしまったかと、しおしおと兎に角夕食会に出かけました。

翌朝とりあえず、70,000円は用意して行きましたところ、運のよい事に宮代会館の地下室のダンボール箱から前日のコイン袋が見つかり、一同大歓声。少し残った品物を地下室に運んだ時にまぎれていたのです。袋をあけて見るとちゃんと7,600円あり、7万持って行った私は、何か急にお金持になったようないい気分になり、見つけて下さった方に感謝感激でした。



会期中はもとより、その準備にもおっとり揃いのアマスクプラザの我々は、これに近い小さな失敗を時々致しました。

或日、我々はあまりに沢山の御寄附に嬉しい悲鳴をあげながら次々と送られて来るダンボール箱をあけては値段づけをして居りました。関西から送られた1つの箱の中に品物と共にいかにもおいしそうなきつまいものお菓子を見つけた私達は「まあ、なんて御親切な

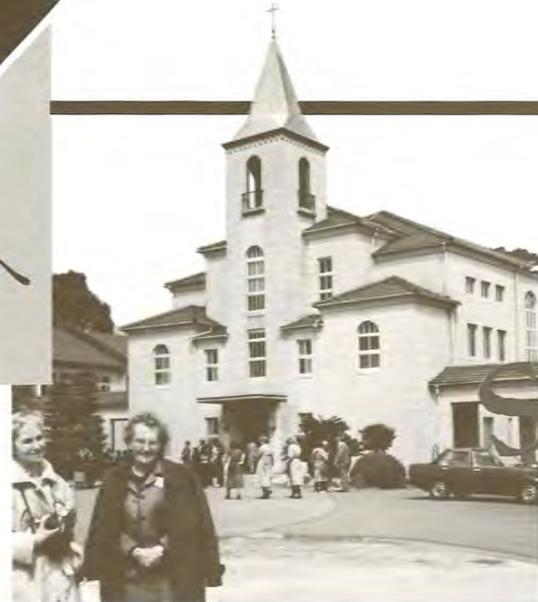


方でしょう。きつと差し入れて下さったのよ」と大喜びでそろそろお腹も空いて居た頃でもあり御好意に感謝しながら全部頂いてしまいました。ところがN様が私宛の小包が今日届いて居る筈なのだけれども一生懸命探して居りますうちに、誰かが、さっき頂いたお菓子のがもしかしたらそうかもと気づき、表書をよく見るとまさしくN様宛となって居り、我々一同びっくりやら恥しいやら、品物はすぐお返ししましたがおいしいお菓子は既に皆のお腹の中……。翌日同じようなお菓子をさがしてお返ししたものの慌てもののおっとり連中の集りねと笑い合った事でした。

追記

アマスクプラザは他の係りの方々と違い、頭を使うよりどちらかというと肉体労働に終始致しました。私は娘が時々手伝ってくれたおかげで比較的楽をしたと思いますが、娘はお年寄りの大先輩の方々が1日中立ち通したり、重い箱を何度も何度も地下室から運んだりなさる姿に改めて大先輩方の聖心に対する愛校心、奉仕の心の深さに胸をうたれたようで御座います。マザーズのお口癖の“You are the children of the Sacred Heart”のお言葉が何十年の歳月を経た今でも心の底に滲みこんで居るのも、一つの原因のように思えるのでした。

(小林みこころ会6回 今井文子)



Susono

東京でのスケジュールがすべて終了した翌朝、オプションツアーA、Bの2班を乗せたバスが、少し重い空の下、東名高速道路を西へ連れて走りました。ツアーAは、裾野の不二聖心を訪問してから、新幹線で小林聖心訪問及び京都、奈良観光という69名。ツアーBは、不二聖心訪問後、そのままバスで箱根観光という19名。A、B合わせた88名と、AMASCやJASHの役員その他、不二聖心の職員や同窓生を合わせて、320名は、茶畑の広がる裾野での親睦会に、一層友情を深めた様でした。

◎ 係の記 ◎

アマスクメンバーの来裾まであと何日、とまるで東京オリンピックを待った様な気持で皆張り切っておりました。度々幹事会を開いては、当日のスケジュールを繰り返し相談し、とにかく全員で心をこめてお迎えすることさえ出来れば、とその日を待ちました。しかし来訪メンバーの人数の変動が激しく、最後の一週間で予定の倍近くに増え、嬉しい悲鳴をあげました。「心づくし」がモットーでしたので、和紙で鶴の箸入れを作ったり、色紙で千羽鶴を折ったりと、手製を心がけました。また歓迎の食卓用に、その日の朝摘み苺を手配したり御赤飯をふかしたり、と忙しく楽しく

準備に追われました。

当日は御ミサで始まりました。メインの歓迎昼食会は、こちらの進行予定通りには行かない部分もありましたが、皆様が楽しげに和気合い合いと食事をしていらっしやるのを見て、心がはずみました。ただ一つ、第一の御馳走の「富士山」が、とうとう顔を出さずで残念でした。真白に迫る雄姿を、何としてもお見せしたいと思って居りましたのに……。

今回のアマスク大会のおかげで、久々に多勢の卒業生が力を合わせ心を合わせて集うことが出来ました。折り鶴のレイを首に、陽気に賑やかにバスに乗り込んで帰るお客様を見送りながら、アマスク大会の成功とアマスクの連帯とを強く感じました。

それにしても、翌日の裾野は時ならぬ大雪に見舞われました。もし1日ずれていたら、と思いつつ神に感謝いたしました。

(ドシェーン会5回 湯山享子)



Obayashi

裾野訪問の翌日、ツアーAの面々は、生憎の天気にもかかわらず、元気一杯小林聖心に到着しました。

◎ 係の記 ◎

3月23日、アマスク総会を終えた各国の同窓生が小林を訪問されるというその日は朝から激しい春の嵐となってしまいました。日本庭園の散策や校舎の御案内等のおもてなしを計画していた私達は、これではさぞ盛り上らない事だろうとがっかりしていました。

同窓生が到着される頃には横なぐりの雨が吹きつける最悪の天候となり、一行を乗せたバスの到着する西山橋まで、急拠、車を持って来ている者達で出迎えに行く事になりました。激しい風雨の中、バスでは降りるに降りられず困った顔の方々が手を振っていらっしやいます。私達も歓迎の挨拶どころではなく、ひっくり返りそうになる傘を必死で差しかけながら、乗れるだけつめ込んで車を出発させました。

ところが外は冷たい雨、中は満員ですから、たちまちフロントガラスは真白になり、前の車にぶつかりそうになる始末。タオルをなどと思ふ余裕もなく慌てて手でぬぐおうとした時でした。横からさっと大きな手がフロント

ガラスをぬぐって下さったのです。見ると助手席の同窓生の方が、自分の首に巻いたマフラーのふきでせっせと窓をふいて下さっています。「そんな……」と恐縮する私に「Don't worry!」と笑いながらどんどん曇ってくる窓をふき続けて下さるのでした。後の席の方々もハンカチやらお洋服の袖口!!やらで思い思いに横や後の窓をぬぐって下さいました。更に途中の狭いカーブの所で次の迎えの車とすれ違うのにひと苦労すれば、車が接触しないか、溝に落ちないかと心配してのぞき込んで下さいます。いつのまにか車の中では、この雨の困難を皆で乗り越えるような不思議な連帯感と、又それを楽しむような和気あいあいとしたものが生れていました。

こうしてわずか数分後に校舎の正面玄関に到着した時には、私達はもう10年来の友人のように親しい気持になっておりました。そしてこの型破りのスタートが、とかく固くなりがちな日本式歓迎行事を心のこもったものにしてくれたようで、その後のレセプションもとても楽しい雰囲気の中に終える事が出来ました。

あの大嵐は同窓生歓迎のための少々荒っぽい天からの贈物だったのでしょか?

(バラ会3回 藤田裕子)



『ゲリラに誘拐された!?』



みこころ会51回

中山 洋子

(アマスクアドバイザー)

大学から目と鼻の距離に住む便利さを買われて、事務局で海外からの郵便受付を担当、「来ましたあ？」とマリアンホールの受け付けを覗く事を日課とする様になったのは、大会を翌年に控えた5月頃だったでしょうか。時折思い出した様に、気の早い参加登録申込や問合わせの手紙の舞い込むのんびりムードの内に夏休みを迎え、9月以降徐々に忙しさは増したものの締切1ヶ月前の11月末には、当初の予定通り海外から200人…等と呑気な予想を立てました。その200人が一気に500人に膨れ上がった最後の2ヶ月間は、髪振乱し目を血走らせ、紙とペンとコピー機とに明け暮れる毎日。今尚目を瞑ると、最終人数の確定を待ちあぐむ各部門の担当者の方達の困り果てた顔が浮びます。

世界の五大陸に跨がる聖心ファミリー故、そのメンバーの多様な事は、至極当然ですが、500枚を越えた登録用紙にさえもはっきりと各々の国民性が表れるのは面白いものです。一番注意深く緻密で日本人の様な書き方をした来たのはドイツ人。自由の国アメリカからの参加者は個性豊かな筆跡で忠実に必要事項を書き込んでくれるのですが何故か一様に数字に弱く、この電卓の普及した時代にと首を傾げさせられた事も屢々。一方幼稚園の頃から九九を童謡の様に口ずさんで来たフランス

人達が誰一人として計算違いをしなかったのは流石といえば、流石です。参加者の過半数を占めたラテン系のメンバーは日々新たなる情熱に駆られて行動する人達ですから、締切等あってないが如し。今日参加するつもりでも明日になれば気が変わり、その翌日には又違う風が吹く…という案配で、遂には到着してみなければ何人来るのか分からないというホテル泣かせの国もありました。

世界32ヶ国といえば違うのは国民性ばかりではありません。日本からの郵便物が切手欲しさに盗まれてしまう為テレックスでしか連絡の取れない国や、手紙に対する当局の検閲が厳しく、聖心やアマスクの名を隠し、謎に満ちた文面のやりとりを余議なくされる国とは、意思の疎通を図る事自体が大仕事なのに、一方天下太平な国からは大会期間中息子を近所の幼稚園に預けたい等と伸びやかな希望を書き送って来ます。当てにしていたベビーシッターが急に来られなくなった為…に始まり、一族がゲリラに誘拐された為…に到るまで参加を断念する理由も千差万別、それぞれの国情を垣間見る思いでした。

英仏西の3つの公用語を持つアマスクですが今回参加した23ヶ国の会員達の母国語は12を下りません。様々に過去を背負い、様々な現在に直面し乍ら、よりよい未来の為に手を携えようと決意する世界中のアマスク会員達は、キリストの御心に習い愛と奉仕の精神を持ってと説かれた聖心会の創立者の御教えが、文化や言語の異なる地に実を結び得た事の証しと云えましょう。

世界の呼びかけに応ずる時代から、世界に呼びかける時代へ、世界の同窓生との印象深い出会いを経て今、2万人を越す日本同窓会会員がその真心と知恵を尽して明日のアマス

クに貢献出来ますようお願いしております。

歓迎のスピーチ

みこころ会38回 三田 千世

大会最初の日、私は御ミサの後に歓迎のスピーチをすることになっていました。

午前中に既に到着している外国人メンバーとのランチョンの後、大急ぎで着物に着替えて美容院に走りました。そこで髪を直してもらっている間に、大会での歓迎スピーチの練習をして、それから又急いで大学に駆けつけました。そこで遠来よりのお客様方と話をしているうちに、御ミサの時間になりました。さて、さっき練習したスピーチを書きつけた紙は、と思い探しましたが紙はどこにも見つかりません。美容院に置いて来てしまったのです！一瞬胃が痛みました。しかしもう度胸を決めてやるしかありません。御ミサの間、ずっと憶い出して言い返していました。一枚の紙があんなに大切に思えたことはありません。

御ミサが済み、ギャラリーまでメンバーで一杯のお聖堂を見た時、本当に感動して、いともたやすく心からの歓迎の言葉を申し上げることが出来ました。

☆小さくなった世界☆

「先日のAMASC大会の折のエピソードの御依頼ですが、昔の忘れていた知人に会うことが出来て、遠い昔の懐かしい日々を思い出したことは、忘れることが出来ません。私がどんなに嬉しかったかだけをお伝えしたくて…。」こう書き送って下さった奥村まちこさん(バラ会1回)は26年ぶりのオーストラリアの方との感激的な出会いを綴って下さいまし

た。「全く想像もしなかった人との出会い。小さくなった世界。AMASC大会でお手伝いさせて載いたお蔭。」と、そのお話しは結ばれていました。

☆ホームディナーに向う車での話☆

車に乗り込む時、某スペイン夫人は、ホームディナーに向う車の乗り口にむこうずねをいやっという程打ちつけてしまいました。すると、大声で泣き出しました。ドライバーも同乗メンバーも大弱り。しかし時間もあることだし、ドライバーの石原多希子さん(宮代会15回)は、泣いている夫人をなぐさめながら、出発しました。ところが、車が動き出すと突然、その夫人は泣くのをやめて今度は大きな声で歌い始めました。一同驚いてしまいましたが、とうとう到着するまで歌い続けていたそうです。同乗のアメリカ夫人曰く「ラテン系の人の心情はわかりません。」

ホームディナーに参加して

みこころ会21回 大戸美知子

3月17日 早春の宵、終に渡辺さんのホームディナーの日がやって参りました。元子さんは数日前からこの日のために準備に忙しくしていらっしゃいました。

午後6時半9人のお客様と先輩の岡村様も御案内役でお迎えする事になりチョッピリ不安と期待そして緊張の入り交った気持で皆さんのお着きをお待ちして居りました。

渡辺さんは腕によりをかけて御自慢料理のオニオンスープを時計とにらめっこで温めて待っていらっしゃいました。

所が10分たっても20分経っても一向においでがなくとうとう一時間余り遅れて皆さんお元気に到着されました。余りに国際色が豊かではじめは誰方が何所の国の方かさっぱり解らず御あいさつの言葉もシドロモドロでした。渡辺家では2人の御息様と三入のお嫁様、それに初等科4年に在学中のお孫様達も御招待に出て下さり文字通り家族ぐるみの観迎ぶりでした。食前のお酒ですっかり不安もなくなりまるで10年来のお友達のように和気あいのホームディナーになりムードも盛り上げて来ました。いよいよメインディッシュの登場です。和洋とりまぜたお料理が次々と運ばれて来ました。一番目玉のオニオンスープの登場です。所が一時間の遅刻がたたって余り何度も温めかえしたので切角のスープが少々こげてしまいました。でも皆さんそんな事には気が付かない程のたのしい雰囲気の中のお食事でした。言葉のギャップを乗り越えてお話がはずみ各テーブルからの笑い声が絶えませんでした。こげたオニオンスープの思い出は苦いどころかあの舌の上のこる玉ネギの甘いトロリとした暖い思い出が皆さんの胸に何時までも忘れずに残る事でしょう。

☆あたたかい話☆

事業部のメンバーは、多くの同窓生の協力を得て外国人参加者の為になんと630人分の手編みくつ下カバーを用意しました。パレスの見学の折などに、冷たい床をなれない素足で歩くのはお気の毒だという配慮からのことでした。

「このくつ下カバーは、本当に大切な心の暖たまるくつ下カバーです。」と参加者の多くが、バッグの奥に大切そうにしまっ

ていらっしゃいました。

座禅道場に行った時、ある外国人のシスターは、「素足ではいけません。素足では失礼です。」と頑固にそのくつ下カバーをはいて、神妙にお歩きになっていらっしゃいました。

同じ座禅会場での話し。シスターイビアは足を痛めていらしたのでバスの中へ一人でお残りになりました。その時一人のヤングメンバーが「御一人ではかわいそうです。私が御一緒に残ります。」とシスターの御相手を申し出ました。彼女は、その後いつもシスターがお動きになるのを手伝って助けてくれました。「あたりまえです。」とは彼女の弁。

スタディーグループの話

宮代会14回 澤井敏子

▲「私達は日本に永住する気持はないです。」通訳を介して伝えられるこの言葉にスタディーグループ(庭屋信子さん、中山公子さん、平塚裕さん)の面々は愕然としました。所は品川の国際難民センター、インドシナ難民との座談会です。かねがね聞いていた様に施設は行届いてきれいですが、埋立地の広いセンターは、病院の様に外の世界と離れた感じで、難民の



故郷のあのインドシナの間臭い町々とは全く違った所です。難民の方々の心は、既に未だ見ぬ米国やフランス・カナダに向いている様でした。そこには本当に彼等の幸せがあるのかしら。今ここで、日本でこの不運な人達が再出発できる様に何か出来ないかしら。インタビューに行った我々の本当の感想でした。▲スタディーグループのスタディは、テレビの刑事の様に足で歩きまわり資料をあつめ、手仕事でアンケートを集めレポートを書いて皆様本当に熱心でした。ご存知の長いレポートが一応出来た後、樺木彩子さん、布能永子さん、平塚裕さん、庭屋信子さん、川口泰子さん、相良映子さんの6人が11月末から年の明けた1月中旬まで、漢字を直し、表現をわかりやすくし、表題をつけ、書式を統一し、とにかく世間に出せる様に仕上げをして下さいました。暮の押しつまった29日も、松飾りもとれない7日にも、おせちならぬおうどんだけで日の暮れる迄頑張りました。皆様、今年のお正月は心ゆくまで大掃除をしておせちを作して下さいませ。

▲一人の人の書いた訳でない長いレポートを曲りなりにも正式にするのは中々大変でした。英訳をして下さった岡本芳枝さん、岡村和子さん、石坂章子さん、内容や表現全体にわたってアドバイスを頂いた齊藤正子先生、シスター中川、会期中はご紹介できなかったこの方々の努力とお使い頂いた皆さんの時間に厚く御礼申し上げます。

▲忘れられないのはレポートの印刷が出来て皆でホッチキスどめをした時の谷道賀津子さん。足を骨折した後でリハビリに通っているのに毎日来て下さいました。しかし、或る日突然姿が見えなくなり、とうとう会期中にも現われませんでした。あの時無理をした為、

足がはれ悪化してしまったとか。谷道さんの様に骨折の後でないスタディの方々も、皆腰が痛くなりました。

☆シスター御招待☆

アマスク大会の成果の1つに、海外から懐かしいシスター方をお招き出来たことが挙げられます。

「シスター招待世話係」を引き受けて下さった加茂千恵さん、勝山富美子さん、小久保光子さんの御努力で、集まった寄付金をもとに、世界各地においでになるシスター方8名にお声をかけたところ、幸運にも5名のシスターを日本へお招き出来るこのになりました。シスターイヴィア、シスターモリアティー、シスターウィリアムズ、シスターウィスタ、シスタークイルティです。



会期中の一夜、三光町聖心にはシスター方にお目にかかりたいと約200名の同窓生が集まり、再会の喜びをわかち合いました。シスター方は御高齢にもかかわらず、大会期間中ずっとお元気で楽しげにスケジュールをこなされ、そのお喜びが広がって皆が嬉しくなりました。大会終了後、皆様それぞれ無事に御帰国になりました。

"It's not what we do that is important, it's what we are that matters."

語学校アラムネ 荒木文子

遙か遠くの方からマザー・ラム、マザー・マクシェーン、マザー吉川、マザーブリットが、「Well done! We are proud of you」と云うお声が聞えて来る様な気が致します。執行部準備委員の皆様、大きな拍手を送ります。微に入り細にわたっての綿密な計画には頭が下りました。皆様が、一体となってお仕事のおかげ様で私などはただ好きな勉強をさせて頂いてすっかり楽しませて頂きました。尤もこれも集近でテーマのお若い方々がおぜん立てをして下さり、面倒な事を一手にひきうけて下さったおかげでございます。海外からの古いお友達や新しいお友達と親交を深め、本当に意義ある一週間でございます。

分散会で私共のグループは福音宣教が、テーマで、この問題に就いて、あゝでもない、こうでもない意見がとび交はされる中で黙って聞いて居られたシスター広瀬が2日目に、開口一番——It is not what we do that is important, it is what we are that matters,"(大切なのは私共がする事ではなく、私共の在り方なのです。)と、爆弾的宣言をされました。その後はもうどんな発言と、結局はその一言につながってしまい、少々しりげ気味になりましたが、さすがシスター、それも日本人の方、私共は大変肩身の広い思いをさせて頂きました。私、個人にとり、この一言は生涯忘れる事の出来ない教訓でありました。外国から見えた方々もこれは深く胸に刻んでお帰りになった事と思います。

ホームディナーの思い出

宮代会22回 飯田光子

名のある御料理など何も出来ない私なので、「日本料理の本」を買いこみ、義妹の特訓を受けながら、約2ヶ月間、色々なメニューを試みてみました。おかげで、いつもひどい物を食べられている我家の面々は、大層喜こんで居りました。いづれにしても、日本趣味の物がいいかと思ひ、献立て作成にはとても気を遣いました。また、義妹のアドバイスにより、「あられ」や「羊かん」が意外と外人受けする事を知りました。

当日、アメリカ人、コロンビア人、メキシコ人の御三方がいらしゃいました。初対面にもかかわらず、やはり同じ聖心というファミリーの一員ですからでしょうか、とても懐しい雰囲気の方々ばかりで、教育の力やカトリックの精神を痛感しました。私のひどい心臓英話も通じ、春とは思えぬ寒さを吹き飛ばす位の「友情」を得る事が出来ました。

お別れの包擁に、いつか又の再会を念じた私でございます。

☆コンピュータ活躍☆

事務局の「名簿作成」は、まさに時代の利器を駆使した勝利といえるようです。内外合わせて1,000人にもものほる名簿を、手描きでノートにつけられたらどんな大変な作業になったことでしょうか。また、名簿を利用するにもどんなに手間がかかることになったのでしょうか。名簿作成を担当した一人、名原素子さんは、ご主人の協力のもと、毎晩コンピューターに向かいポッポッポチボチとデータファイルに名簿をインプットしました。コンピ

ューターを利用したおかげで、気の遠くなるような名簿作成の仕事も、随分手間が省けたということです。ちなみに、インプットされたデータには、一人一人の国籍は無論のこと、訪日に関するすべての行動予定(飛行機・宿・ホームディナーの行先・新幹線・参加ディスカッショングループ)に及ぶものでした。

いろいろの同窓会から、いろいろの年代の同窓生が集まって、必要な場合にはいつも適材適所、それぞれの方が素晴らしい素質と能力を発揮してアマスク大会の成功をもたらして下さいました。感謝をこめて、原沢よし子 (事務局)

ホームディナー 送り出しプロジェクト

宮代会20回 原科節子

大会1年前にホームディナーの準備をお引き受けした時点では外国語参加者約200名、日本側ホステス宅、約30軒の予定が、実際には参加者580名、ホステス宅69軒。送迎用自動車約百台という考えられない程の大規模なものとなってしまいました。「盲蛇におじず」で、よくもこのような恐ろしい事がやれたものだ、と思うと共に、今更ながら卒業生のご協力の有難さをひしひしと感じている次第です。

大会前日まで正確な参加者人数が判明せず、それでもホステスにはゲストの名前をお知らせして車の割り当て表を作成し、又、ホステス宅の話せる外国語はほとんど英語だったにもかかわらず、スペイン、イタリア人だけでも合わせて200余名、英語の話せない方も



一緒にませ合わせざるを得なくなり、割り振り係は、ついに夢にまで外国人の名前が押し寄せて来る程の大奮闘でした。お招き下さる人数は一軒につき最大40名から2名までと様々で、ご家族総出で、あるいはお友達の車で迎えて下さる方もありましたが、「お迎えは出来ません。」と言われた方の為に運転ボランティアとして30余名お願いしました。

すべてのホステス宅に番号をつけ、多人数を招いて下さる方々の地域には大型バス4台で各々最寄りの場所に送ることとし、あとは都内を大きく4ヶ所に色分けし、迎えの車につけるステッカー、駐車場、ゲストの名札、招待状、会場内の椅子など、すべて同色で統一して分かりやすくグループ分けしました。(例えば、赤グループは、世田谷方面で管理棟前駐車場とか、白グループは麻布方面でインター駐車場など)

いよいよ当日、各色のステッカーとホステス宅番号及びゲストの名簿を貼った迎えの車が、決められた駐車場で待機、そこ(ミサが帰って各色別プラカードに先導された、これ又、同じ色の名札をつけたゲストが、駐車場までゾロゾロやって来たところで、お互いに番号を呼び合ったり、名前を確認しあったりして、すでに暗くなった大学構内は大騒ぎとなりました。でも、それもほんの一時で、各々の車

におさまって、駐車場係の懐中電燈の誘導に従い整然と、何の混乱もなく次々とゲストの家へむかって行きました。去って行く赤いテールランプを見ながら、すべての方が事故もなく楽しい一夜を迎えられるように感謝と共に祈らずにはられませんでした。すべての駐車場から、全員無事出発したと報告を受けホッと一息、マリアンホール玄関に戻ると、案の定、一組積み残されたグループがありました。そのような事態が起るであろうと待機して下さった卒業生の車に早速乗せ、後を追いかけてめでたく他の仲間と合流出来ました。又、自宅に到着したホステスの方から電話がかかり、名簿とは、違う方を連れて来てしまったとのこと。そういえば、該当するゲストがいないので、やはり迎えの車が見当たらないと騒いでいたゲストを代わりに連れて行くと言っていたドライバーがいた、と係の方から、報告があり、「ここで入れ替ってしまったのだ。」と大笑い。「どうぞ、そのままおもてなし下さいませ。」とお返事して解決しました。全員出発後1時間、不測の事故にそなえて落ち着かなく事務所ですわって待ちましたが、後は「無事送り届けました。」との電話がかかるだけで、係一同心から安堵し、大会一日目だったにもかかわらず、もう大会のほとんどが終わったような気楽な気分になってしまいました。

ホームパーティのエピソード

みこころ会20回 山田喜美

当日はドイツ、スペイン、オーストリア、オーストラリア、アメリカ、メキシコ、コロンビアからの15名のお客様が見えました。世界地図に御国の場所をピンで止めました。

お雛様が飾って有りましたので、それを見て頂き、その前で日本酒で乾杯など致しましたが、長く座っていらっしゃるのは御無理かと、別室に分れてお話などを伺いました。

手作りの幕の内べんとう、吸物、酢の物、ちらし寿司、にぎり寿司等でお食事をいたしました。殆んどの方がお箸も上手に御使いになり、お寿司の生物なども召上って下さいました。

御客様から御国の珍しい物等いろいろの御土産を頂きました。こちらからはこれと云った御土産も用意出来ず、手持ちの各地の民芸品や小風呂敷などの外に、手作りの折紙の姉



様人形を付けた箸紙や折紙で作った角箱に入れた雛あられをささやかな記念にと御持ち帰り頂きました。十分なおもてなしも出来ないのでせめて着物の着付けでもと、希望の3人の方に振袖を召して頂きました。手許にある着物は可成り大寸なので、大柄で初めて召す方にも割合楽に御着付け出来ました。写真にその様子的一端を御覧下さいませ。

時も移り御帰りの時が迫っても、暫く着心地を楽しんで下さっていたりお名残りは盡き



ませんでした。もう少しこうすればよかった、カメラ係も手不足だった等と心残りではございましたが、ホームパーティーの御手伝いが出来たことを心から感謝しております。

松尾直子 亀山泰子 山田喜美
安井憲子 城 知子

ホームディナー

小林みこころ会18回 栗山 操

多少海外在住の体験もあり、何か少しはお役に立ちたい気持ちからホームディナーをお引受けした。当17日(月)の夜は米豪コロンビアの3カップル6人という事で主人にハイヤー2台で大学に迎えに行って貰った。私は家で準備をしていたところお電話があり、コロンビアの方が残って他の方がお宅の車に乗って行ってしまわれたこと、一体どうした事かと訝っていた処、お一人予定外の西ドイツ・ケルンから79才のミセスライスと一緒に来られた。彼女がいわれるには誰かが28に行くよう教えてくれたので、主人の持っていたNo.28のカードの所に行った由、ご本人のカードは20Aでtwenty A,とtwenty eightのとり違え、加えてコロンとコロンビアの間違いもあり成程と皆で笑った事だった。問題のコロンビアの方をお迎えにと思いお電話したらもう他に手

配済みとの事一同ホッとしたが思いがけないハプニングであった。私の和洋折衷の料理も気に入って頂き、又、米豪独日4ヶ国のインターナショナルな話題が楽しくアツという間に11時過ぎになった。ともあれ聖心の同窓生という事で3ヶ国のお友達が増えた事を、とても嬉しく思っております。

ホームディナー

宮代会15回 加藤万紀子

ハイケルさん夫婦が我家にみえたのは、あの雪の日の翌日であった。腕によりをかけてとは言わないまでも、何か日本的な食事でもてなしをと考えていたのであるが、突然の雪で何も買えず、結局お寿司とお吸物・お漬物そして梅干やら納豆など冷蔵庫のものや缶詰を利用した即席のものとなってしまった。

食事の後、お習字の話となり「書いてみませんか？」ときくと「そんな事出来るの？」と嬉しそうな顔をされた。硯・墨・筆と用意し、下手ながら私が「日本」とお手本を書いて、それを見ながら書かれたのがこの写真である。ご主人の方は、座わるのが苦手で、ソファにすわったまま筆をとったが、彼女は畳にすわり一呼吸して書いていた。お二人共とて



も興味深げにそしてゆったりと楽しそうに筆を動かしていたのが印象に残っている。

Coeur de Jésus Sauvez le monde

宮代会8回 北野泰子

「クール ドゥ ジェズ ソーヴェル モンド」。大会最終日、ミサ閉祭の折、満堂に溢れる歌声を聞きながら、この楽譜の準備ができた事に安緒の胸をなでおろすと同時に、お力添えを載いた多くの方々に心から感謝申し上げます。



開会のミサも滞りなく終り、ホッとしていた折、AMASC恒例の聖歌がプリントされていないとの御指摘が、外国の同窓生からあったという事を聞きました。ここ、3年いわず「なつメロテープ」の製作に携わり、典礼のブックレットの為に忙しい日を過ぎて来た者にとっては、気になる事でしたが、漠然とした題のみでは探しようもなく、諦めに近い気持ちで居りました。シスター方も、御尽力下さったのですが、思わしい結果もなく大会は一日一日と進行して居りました。そこへ、オーストラリアのグループから、有難いお申し出がありました。たまたまホテルでの仕事が

持ち場であった私に、皆で歌ってきかせてあげるから部屋迄来てみたらと云って下さったのです。ノート持参でお邪魔すると心よく2度、3度と歌って下さり、御蔭で、どの聖歌か解り、歌詩を手に入れることもできました。けれども、皆で歌う為には、楽譜も必要ですし、伴奏も考えなければなりません。切羽つまった揚句、今回オーストラリアから再来日なされたSr.ウィスターをお煩わせし、採譜する事にしました。Sr千鶴の御助力も得て、何とか書きあげました後は急転直下。労せずして、伴奏譜、伴奏者までが、思わぬ処から現れ、閉会前日、コピーを完成する迄になりました。

一緒に歌えて嬉しかったとわざわざ云いに来て下さった方もあり、「良かった」と思ったのですが、コロンビアでも歌わせるであろうこの曲をテープにいれなかった事が何とも残念に思われてなりませんでした。

☆ああ、何という偶然!!☆

ホームディナーの日の午後のことでした。阿部みどりさん(みこころ会39回)は何人かのお客様を予定していたので、早く家に帰ろうと大学構内に置いてあった車のところへと急いでいました。するとスペインメンバーが4人、どこかに買物に行きたいから、タクシーに乗れる所までつれて行ってほしいと近づいて来ました。家へは早く帰りたいし、さりとて見捨てる様なまねはできずというわけで、一たんこぎ出した船、とうとう銀座までお連れすることになりました。その車中でまさに阿部さんのその捨て身の親切心が人と人との過去のつながりを、みごとに復元することになったのです。車に乗ったスペイン人の一人

が、1枚のセピア色した写真を差し出し、その中の日本人女性に会いたいとおっしゃるのです。彼女のおほろげな記憶の中での話を、運転しながら聞くうちに阿部さんは、その話の中の人々と、知人の御家族のイメージとが重なり、まさか、いえともすると、と交錯する気持ちの中で帰宅後すぐその知人宅へ確認の電話をしました。「ああ、何という偶然！」不可能に近い願いが、阿部さんの車に乗ったことかなえられることになったのです。この37,8年ぶりの劇的な再会は、都ホテルにて、歳月を乗り越え、深い喜びと友情に包まれて実現しました。同窓生同志の再会ではありませんでしたが、同窓生の橋を渡っての素敵なお再会でした。ちなみにそのスペイン夫人は、元駐留アメリカ軍人コーネルホワイト氏の令嬢でありました。

和やかな夕食会

みこころ会25回 吉武直子

大変御寒く風の強い日でございました。アメリカの方が3人、ドイツとオーストラリアの方お一人ずつ、5人の方々に手作りのものばかりでおもてなしさせていただきました。妹の篠崎淑子(25回)次女の長澤徳子(49回)にも応援を頼みました。

初めてお目にかかりましたのに旧知の方々のような懐かしさを感じられ、末娘の由子の歌う「からたちの花」等をまじえまして和やかな夕食会になりました。

皆様からは御礼のお便りが届きまして本当に嬉しく思っております。

アマスクの地図のデザインは、もともと1959年のクリスマスカードのために主人とデザインしたもので、AMASCの文学は聖心会

が創立された時代の字体にいたしました。

これをお使いいただきましたことは、誠に光栄で、私共にとりまして大切な思い出となりました。

1,000人分の大騒ぎランチ

ランチ係

当初の少ない予算を何とか補うため、昼食3回は3つの同窓会にそれぞれスポンサーとなって頂くことになった。参加者数の増加に伴い準備委員会会計から一部予算を計上したが、それでも一人当たり1食800円。この額で何とかして頂きたいと学食フォーカス社長にお願いした。

参加者数は判ってもその中何割が昼食をとられるか全く予測がつかず、又短時間に大勢が食べなければならないので、人の流れが停滞しないよう苦心した。

グループディスカッションの日はグループ毎に教室で食べられるよう箱入りサンドイッチとゼリーに缶紅茶。コーヒーは廊下のコーヒーコーナーで各自飲んで頂くよう手配した。1,000人分のサンドイッチ作りは意外に時間がかかるもので、出来るそばから2階に運びようやく昼に間に合った。

学生食堂での2回はストロガノフとヌードル、中華風と取り分けのし易い大皿盛りにし、「追い込み係」がとにかく奥からどんどん席に着かせ、3つの食堂にふり分けた。一寸驚いたのは、自分のテーブルにある分で足りず、さっさと隣のテーブルのお皿にまで手を出す人がいた事。分量にはずいぶん気を配ったつもりが、あの柄な集団にはやはり不足だったのかと反省。

コーヒー・紅茶をどうぞ

コーヒーブレイク係

みこころ会39回の私達10名は、コーヒーや紅茶をサービスする係としてアマスク東京大会中の4日間を、主にお台所の中から大会に参加致しました。

先ず大会前に予算を考えて、4,000人分のコーヒーと紅茶を用意する為の買物に卸売市場へ行く仕事から始め、1キロ入りのコーヒーの缶、マドラー、紙コップ、コーヒー用のクリーム、スティックシュガー、特大のビニールごみ袋を買って揃えました。大会期間中はコーヒーブレイクの時間に合わせて2台しかないガスでお湯を沸かし、フィルターを使って魔法びんにコーヒーを順序よく作ることを繰り返しました。コーヒーに関しては大した問題もありませんでしたが、紅茶に関しては大変むずかしく、長い間魔法びんに入れておく香りも勿論のこと、色も黒ずんでしまっていました。又、クッキーが日本茶があればと言う御要望も何度か耳に致しました。何しろお客様相手のぶっつけ本番の仕事で、それもその日によってサービスする時間や場所、人数も違うので不手際も多々ありました。でも一番慌てたのは確か2日目だったと記憶して



おります。コーヒーブレイクが無い筈の時間にマイクを通してコーヒーブレイクが伝えられたとかで、お台所迄コーヒーを求めてお客様方がいらっしゃり、そんなこととは知らない私達は大変驚かされました。すぐにヘッドの方が訂正に奔走してくださり一件落着致しましたが、連絡の不行届きを感じた一幕でした。

今回この文をまとめるに当ってお手伝いした10名に連絡したところ、全員が開口一番それも異口同音「楽しかった。」と言う感想を述べておりました。一つの目的に向かって一致協力して奉仕することの尊さと喜びを満喫して、幼い頃に学んだ聖心のスピリットを思い出しながらこんな形でアマスク東京大会に参加できた幸せを感謝致しております。

ヤングメンバーズの会合

みこころ会70回 小堀麻子

AMASC世界大会が開始して、その参加人数に圧倒されましたが、同時に自分と同じ世代の同窓会員が予想以上に多かったことにおどろきました。大会3日目にYoug membersのために集まりで彼女達と交流する機会を持つことができ本当に楽しかったので、そのことについてご報告したいと思います。

三田さんの簡単なご挨拶のあとピュッフェ形式の夕食を頂き、それからくじで一人一人にプレゼントが当たりました。化粧品や日本のしおりなど自分のいただいたものを見せあううちに、あっという間に友達は何人もできました。おしゃべりが一段落ついたところで、今度は各国で出し物をする事になりました。オーストラリア、アメリカ、スペインがそれぞれ国歌や動作を交じえた童謡を聞かせ

てくれ、少人数の国は他の国にまぜてもらいました。カナダの人達が「私達はアメリカは好きだけれどその一部ではなくて独立した国です。」と言ったり、ただ一人のベルギー人がフランスではなく自国の国歌を歌ってみせたりしたときは、国際関係の縮図を見ているようで興味深かったです。



最後に日本の同窓会員で「大きな栗の木の下で」と「さくらさくら」を歌い、「かごめ」を実演してみせました。日本の曲は短調が多く外国のものほどの派手さはありませんでしたが、かえって日本らしくてよかったのか、大きな拍手をあげました。最後に皆で、「4年後にここにいる全員でボゴダへ行きますよ。」という約束までして解散しました。

それまで全く交流のなかった私達がこの晩の会を通して同じ「聖心の子」として連帯感を持ち、母校のために一致協力して何かをしようという気持ちを持つことができ本当に嬉しかったです。約束通り、彼女達一人一人と1990年にコロンビアで会おうのを心から楽しみにしています。

☆ヤングメンバーとしての出席☆

ヤングメンバーの一人、石田佳子さん(宮代会33回)は、「初めての国際会議ということもあって緊張したが、背が高いことから「どこの国の方ですか。」と諸外国の方々から笑顔で声をかけられ一遍に緊張が吹き飛んでしまい、初日から多勢の方々顔見知りになり、御蔭でささやかながら友と勇気を得ました。」とお手紙を下さいました。



私には思ってもいないハプニングであった。ハプニングといえば帰り際に、来日以来3度目の鼻血が出たアメリカの御婦人がいらした。私があわてて氷をもって来たりしたいううちに、夫の先導で、ほとんどの人々は玄関から消えていた。少々寒さが加ったように思われたが、裏道を通って、歩いてホテルに向かったのだ。そばで一人残って見守っていらした方は、あとでうかがうと、オーストラリアでは指折りの女医さんだった。思い出す度に、はじめて会った方々の集いとは思えない、周囲の方々にささえられ、何かほのぼのとした温かい思い出をのこした大会のひとつまであった。

☆"Sr.ジギー、Sr.ジギー"☆

大会が始まって早々のある日、年輩の外国からの参加者が一人事務室に飛び込んで来ました。「首の囲りをやけどして傷が痛む、Sr.ジギーが医者連れて行ってくれると云ったから早く連絡して欲しい」とのこと。新しい傷でもなさそうだし、そんな名前のSrはこのキャンパスに居ないと云っても承知しません。猫の手も借りたい程の忙しさの中、事務局のメンバーは皆困惑。心の広い委員長がSr.ジギーな

ど存在しないのを承知で各修院に電話。「そんな名前のSr.が居ないこと位貴女は知っているでしょ」と逆に叱られ、遂に本部修院に依頼、一人のSr.に御医者様に連れて行って頂くことになりました。それでもまだ治まらなかったのか隣のパーラーで傷が痛むと泣き喚き、事務局員が氷を探して冷やしてあげるなど大騒ぎ。後で引率者に聞いたところ、やけどをしたのは1月とのこと。外国に来た緊張で又は日本の気候のせいで治った傷がまた痛んだのか、特別注目してほしかったのか未だ判らず。判ったのは日本人は親切だということでした。

Booklet作り

Liturgy 典礼係

典礼の係の仕事は英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語・日本語の5ヵ国語(直前になってイタリー語が加わり6ヵ国語)ですということから、司式司祭選り、典礼式文のbooklet作り、各ミサの朗読と共同祈願をする方との連絡など、実に沢山の課程があり、また会期中毎日時間と場所が異なったため、予想以上に大仕事だった。

特に78頁に及ぶbookletを900部作るには、35100枚の印刷された紙を1枚1枚二つ折りにしてから頁順に重ね、表と裏の表紙を合せて大型ホッチキスで止めるのだが、その作業が本当に大変だった。1日目はほんの数人で始めたが次の日からは一人一人が仲間を誘って現われ、のべ100人くらいの方々の手を煩わせて10日かかった。その上、全部出来上がったから表紙にスベリングミス(AMASCをAmascとした)が見つかり、国外の参加者の

分だけでもと、600部は表の表紙を刷り直して付け替える事になった時は、忍耐強いスタッフも皆泣き出しそうだった。

しかし、初日の開会ミサでの素晴らしい一致の雰囲気は、全ての苦勞を忘れさせるのに充分だった。お聖堂の1・2階を埋め尽くした1,000人近い聖心の卒業生が、国籍の違いを越えて真に祈っている姿は感動的だった。司式のドイル神父様も滅多にない感動に胸が熱くなったとミサ後に言っておられた。



打ち合わせのために、三光町やカテドラルに何度も足を運んだこと、マリアンホールでミサがある日には会議の合間を縫って祭服や用具を運んだこと、大学聖堂とカテドラルでの補助席作りなど、思い出は尽きないが、あれだけ素晴らしい典礼を行なえたのも、シスター速水とシスター影山のご親切なご指導とお力添えがあったればこそで、心より御礼申し上げます。

刺激になりました

みこころ会45回 大石 恵子

アマスクも無事終わって、かなりの日が経った頃、アメリカから大きな白封筒の便りが届いた。ケンウッドの聖心の修道院からのお

ホームディナーをお引受けして

みこころ会35回 三輪 恵美子

大会間近になって、マンション住いの私も、「ホームディナー」をやっとお引受けする気になった。

スペイン・アメリカ・オーストラリアの方々6名、平均年齢65才、と聞いたので、お隣の三光町聖心のSr.河本や、スペイン帰りの近所の同窓生にも来ていただくことにした。娘達も料理はおまかせ下さいと云ってくれた。

当日になった。私は箸筥から6枚の羽織を取り出し、お客様に着せて写真をとろうと用意はしたが、他はすべてアドリブで行こうと思った。

家の前に止ったバスから降りて来られたお客様の中には杖の必要な方もいらした。全員同窓生と思ひ込んでお話ししていると、中でも一番若そうな一人は、友人にさそわれて一緒に参加され、御自分はキリスト教でもないし聖心のことは初めてだと聞かされた。

なごやかな雰囲気でもみんなが打ち解けあった頃、ひょっこり夫が紋付に袴姿で出て来た。お客様は大喜び。お箸をつかった長い食事の後はお得意の「老松」を踊って御披露した。

便り。あ、この方、御一緒にお昼を大学のお食堂でいただいた。日本人4人、アメリカ人2人で座っていたあのテーブルで、ごちそうを取り分けるのもどかしそうに、すぐ私達に問いかけていらしたっけ。「日本では、女が働くということはどうなっていますか？あなた方は何か職業を持っていますか？」その席に居合わせた4人は、丁度、主婦専業で、家では子供を教えたり、ボランティアでお手伝いしたり、そんな風に答えていた。「御主人はそれに対してどう？」本当にたたみかけるように質問が飛んで来る。その後は、アメリカの現在の事情をお2人が代るがわる話して下さり、そこから、久しぶりの英語に夢中でついて行っていた私は、少々疲れて、時々分かったり、分からなくなったり。御同席の方々の達者な会話に感嘆して聞き役専門に回った。上手でなくてもいい。けれど、色々な問題をお互いに討議し合って折角のチャンスを生かせる位に英語を話したいなどつくづく自分の不勉強が残念だった。

印象に残ったのは、ケンウッドのシスターの積極的でにこやかなお人柄。単刀直入に、日本について知りたい話題で切り込んでいらしゃる。並ならぬ好奇心。初対面であろうと憶する所もなく。私にはとうてい真似が出来ないけど、おかげで大層勉強になった。

こういう思いがけない出会いを、準備して下さった、アマスクの関係者の皆様、どう御礼申し上げていいか、分からない。

教室で

宮代会34回 清水久美子

「先生の春休みの思い出、話しますね。」

四月、新学期、新しいクラス、新しい生徒、胸

がどきどきします。頬を少し紅潮させて、簡単な自己紹介のあとで、私が言った言葉です。

春休みの思い出——今年アマスク大会の思い出です。大会初日、緊張ぎみの私が出会った方々は、オーストラリアから御夫人方。

「東京はすばらしい、超近代的だ。」

「これからすぐタケシタ・ストリートに行きたい。ここから歩いてゆけるかしら。」

原宿が御夫人方の興味をひいたとは、生徒達、不思議そうでした。皆、皇居や東京タワーが一番人気と思っているのですね。浅草・築地という声も、出ていたようです。

原宿探検の夜、再び彼女達に会い感想を尋ねてみました。

「東京のファッションは可愛いね。」

「原宿では皆スキップしているみたいね。」などなど。皆さん想像以上に良い所だった様です。——話はまだ続きます。

定年退職した御主人と2人で、老後はのんびりと羊を飼って暮らしたいと言っていたミセスD。日本は遠い遠い国と思っていたが、日本人は私達と気が合いそう。今度は絶対主人と来るわと断言したミセスN。本当は京都に行けるのが楽しみなの、と茶目っ気たっぷりなミセスR。そして、私が教師をしているというので、「あなたの生徒さんへ」とバズルやノートを下されたミセスM。



日本が国際化したとは言っても、まだ直接外人と接したことの無い生徒がほとんどです。テレビや本で見ることは、一味違っていたのでしょうか。大変静かに聞いていました。

時計を見ると、もうすぐベルが鳴りそうです。ここで一度新しいテキストをあけます。

「新しいテキストの第1課、『オーストラリアと日本』。明日から入りますよ。」

生徒達、みんな元気に頷いてくれました。

☆春の味☆

小林聖心に到着した時、誰も皆ひどくのどが渇いていました。しかし、そこに待っていたものに、真っ赤に熟れた水々しい苺がありました。皆飛びついていただきました。

さて、この苺、ただの苺ではありませんでした。小林聖心から車でおよそ1時間、六甲山の裏手に三田という所があります。その苺はそこでとれる地苺で、その赤さと甘さとおいしさはつとに有名なものだそうです。それを是非メンバーにと、小林みこころ会前会長浜崎美津子さんが、大雨の中わざわざ用意しておいて下さったものでした。

苺の甘さと浜崎さんの御心遣いとが、渇いたのを一ぺんに潤わせ、皆、幸せな気分です。六甲の春を味わいました。

アマスク後日談

宮代会7回 Sr. 竹井 恒子

1. アマスクの体験を後輩に

札幌聖心女子学院では、6月22日(日)例年の「父の日」に、小堀玲子アマスク前会長に御来校頂き、父母、全中高生対象に、聖心の教育について、ご講演をお願いしました。生

徒は、その以前にアマスクのビデオを見ていましたし、父母には、当日、控室で講演前後にそのビデオをお見せしたので、雰囲気も盛り上りました。講演はすばらしく、聖心学院の教育を見直し、考えようという意気込みと、このような国際的な学院に入学できたことを改めて感謝するという気持ちをかもし出して頂けましたことを嬉しく思います。生徒は、メモを取り、講演のあとのホームルームで父母も交えて、話し合い、互いに理解を深めましたので、一同喜んでます。



2. アマスクのおかげで大家族

札幌聖心の英語専攻科生の第5回アメリカでの夏期英語研修は、セント・ルイスのメリビル大学で4週間行われました。アマスク開期中に小堀会長から、セント・ルイス地区の会長、パット＝シーアンを紹介して頂きましたので、7月に早速同地区の卒業生代表の方と計画して下さり、22名の学生のために11家庭が2日間のホームステイを引き受けて下さいました。セント・ルイス市長からは「聖心の日の宣言」をして頂き、旧カテドラルのごミサのあと、11家族と一緒に消防車で市中を廻ったり、市のアーチの中の見学や、プールで遊んだりしました。学生たちは、卒業生のご厚意にすっかり甘え、パパさん方から

もかわいがって頂いたり、同年輩のお嫁さん方とも友だちになったりして「聖心の大家族」を体験できましたのも、アマスクのお蔭と感謝しています。

アマスクに参加して

みこころ会8回生 白井万里子

御復活が過ぎて一週間程経ったある日、アメリカから一通の手紙が届きました。それはアマスクでお会いしたミセス・オキーフからの思いがけない御便りでした。

早春とはいえ、冷え冷えとした3月半ばの数日を、世界各国から集まって来られた聖心の卒業生達と共に過ごすことが出来たのは、私にとって又とないしあわせな経験でした。中でもグループディスカッションは忘れることの出来ない思い出となりました。

グループの中の、アメリカから参加されたシスター・ウィリアムスの暖かいお人柄もさることながら、活発なディスカッションが続けられる中に、国籍も年齢も越えて、心のふれあいを感じられました。2日にわたるディスカッションが終わった後も、お名残り惜しく、記念撮影などしてお別れしました。私共親子の外に、オーストラリアからもお母様とのお嬢さんが参加されていたので、二世代の出席者は珍しいと、二対の母子と一緒にカメラに収まったりいたしました。

イースターの喜びと共に送られてきた便りを読んで、世界中の聖心の子供達の中に、マザー・マグダレナソフィアのお心がゆたかに根を下していること、そしてアマスクの成果が実っていることを強く感じました。

出会い・再会・スミレの花

三光会16回 坂井礼子

大学の裏門の階段を登り切ったところに、一株のお茶の木があります。その根元にスミレが点在しているのに気付いたのは、世界大会の準備委員になって、宮代会館に通うようになってからでした。

毎年、スミレの季節になると、あるシスターのことを、思い出します。20数年前、沼津駅でお見送りの時、スミレを一株大事そうに持っていらしたのです。

その後の事は、お噂を耳にしたこともなかったのですが、多分、あの時のスミレがこんなに増えたのではと、想像しながら、会議に出ていました。

世界大会の準備は、4年前小堀会長方の呼びかけで、スタートした訳ですが、その年の夏、裾野の同窓会の会場に、協力要請に見えた会長の一言一言が妙に心に残りました。

消極的で逃げ腰の私が、ひょんなことから三光会のお役を引き受けるようになったのが2年前で、1年前から大会の準備委員に加えて頂きました。手さぐりにも似た長い準備期間を経て、あの東京大会がかくも友好的に盛り上がったのは、一体、何ゆえからだったのでしょうか。それは、今日の聖心を築き上げて下さった方々の、計り知れない犠牲と、その御恩に報いる為に、微力ながら捧げた卒業生達の犠牲が1つになったからでは、と考へたりしています。又、多くの男性方の御協力も、忘れてはいけません。今迄、

今回の大会で、私は外国のお方との交流は殆んどありませんでした。その代り、国内での恩師、友人達との再会には恵まれすぎました。又、各同窓会の方々との出会いは、今迄、

心の中で勝手に作っていた或る種の頑固な壁を容易にとり払ってくれました。

それにあのスミレのシスターにも大会後バツリお会い出来たことです。でも余り突然でしたので、スミレのことは聞けませんでした。

Woman on the Land

みこころ会48回 松方恭子

多くの海外からの参加者と、日本の卒業生の喜意にあふれた協力でささえられたアマスク大会は、私にとっては、よき先輩に多くの事を教えていただき、微力ながらお手伝いさせていただき大変よい経験となりました。

会期中に、私は、オーストラリアの聖心の卒業生で、ミセス・キャロリン・リヨンズという方と仲良くなり、彼女が私に手渡して下さった“WOMAN ON THE LAND”という本を読んで、聖心の卒業生にもこういう方が居られるのだという驚きと感激を味わいました。

日本の20倍の国土を持つ広いオーストラリアの一つの州、ニューサウスウェールズには、76,700人の女性が主婦として、母親として働くかたわら、広い牧場の経営から、牛や馬羊の世話、穀物の栽培、工作機械の操作、生産物の荷作りなどを、家族の助けと共に、驚いたことには楽しんでされているというの聞き、最初にその本を手にした時は信じられず、彼女に「本当にあなたはあの本に書いてあることをやっているの?」と、思わず聞いてしまいました。

ここに、オーストラリアから書いて下さったお便りを御紹介して、皆様にも、彼女の母として、主婦として、牧場主としての素晴らしい話やくを知っていただけたらと思います。

(係記・何頁にも渡るお手紙も同封載しましたが、紙面の都合上、その掲載は出来ませんでした。)

☆アマスクその後☆

アマスクのメンバーは世界中至る所にいて、それぞれ歓迎したりされたりしています。榎原恵子さん(みこころ会38回)は、大会中に知り合ったオーストラリアとドイツの2人のメンバー両方に、大会後それぞれの国で再会することが出来ました。再会にあたって、日本でしっかり御約束したわけでもなく、直前に出した一通の手紙で旅行予定をお知らせただけだったので、その国で目の前にメンバーの姿を見た時は、本当に嬉しかったそうです。そして、その両国の御二人共、「東京大会での日本のメンバーの暖かい歓迎に、心から感謝しています。どうぞ皆様によろしく。」と榎原さんに託されたそうです。

一人のメンバーの訪問を、一人のメンバーが心から歓迎する。そこにも、アマスク全体の交流の姿が見られると思います。

☆お世話になりました☆

大学を「会場」として貸していただいた為に総務課・学生課・マリアンホール受付・印刷室・清掃の方々にも大変お世話になりました。

期間中はもとより、その前から連日、色々な面で御助力、御協力いただきました。

総務の小泉さん、「大会の準備で非常に心配だったのは、急病の応急対策と、駐車場の確保でしたよ。パレスの展示は特に印象的でしたね。とにかく私は、曾てない、良い経験をし

たと、喜んでます」

マリアンホール受付の皆様。「とにかく、お
おぜいの方がお見えになりましたねえ。活気
があって、とても良い雰囲気でした。ただ、
トイレと赤電話が少なかったので、どちらに
も列を作って並んでいらしたのはお気の毒で
した。また赤電話に自国のコインを入れてし
まう方がいらして、故障してしまったことも
ありました。アマスクの受付とここの受付と
をまちがえて、何人かの方が何かとたずねて
来られるので少々困惑しましたが、日がたつ
につれて、顔見知りになった方もあり、人種
の違いをのりこえて、心の通うことも知りま
した。」

印刷室の桑原さん。「あの頃はフル回転でし
たねえ。平均月20,000枚の紙を印刷してま
すが、あの時は、B4版だけでも月30,000枚は
いきましたよ。大会が迫った頃は日曜出勤もあ
りましたがね、とにかく協力出来てとても嬉
しいですよ。」

まだ冷たい風の中、大学のキャンパスで、
こんなにも暖かな多勢の方々の応援と協力が
あったことを、今さらながらに心に刻みたい
と思います。

本当に有難うございました。



AMASC東京大会に至るまで

元JASH書記 大会準備委員 坂上多恵子

AMASC会長国が米国から日本に移ること
になったきっかけは、1981年に当時の
AMASC役員を日本に招待したことに始まる
と思います。サンフランシスコ大会へ向けて
の宿題であった「東西対話」について勉強会で
話し合いをしている中、何よりも直接ふれ合
うことが大切、日本(東洋)と西洋の違いを役
員に体験して頂こうと話がまとまりました。

話はまとまりましたがこれを実行に移すこ
とは大変な仕事でした。当時はまだJASHの
存在すら全卒業生に伝わっていなかったのに
更にJASHの上に世界的な連りがあること、
その役員を招くということも多く卒業生に
理解して頂くため各同窓会役員には大変なご
協力を頂きました。

グレイ会長、書記、会計の3名は日本の聖
心卒業生の同窓会活動に対する熱意と組織力
に感嘆して帰国されましたが、これが後に
AMASC執行部を日本に渡したいと望まれる
原因の1つになるとは予想もしませんでした。

次の会長を各国から指名する段階でJASH
としては未だ時機尚早と立候補を見合わせま
したが、日本の同窓会活動を目のあたりにさ
れたグレイ会長から具体的に5名の名前を挙
げ、その中の誰か立候補してくれないかの
要請がありました。その5名はそれぞれの立
場でAMASCとJASHに関してこれ、世界
の動静、日本の事情をよくご存知でしたので、
話し合いをして頂き、御意見を伺うことにな
りました。

これだけ日本に期待されたからには誰か立
たざるを得ないという点では皆さんの御意見

が一致しましたが、それでは誰がとなると、
それぞれ御仕事、御事情があり快諾は得られ
ませんでした。グレイ会長の折角の評価、依
頼でしたが立候補締切も迫り、やはり今回は
辞退するしかないとなりました。

諸外国でも同様な状況だったのでしょうか
締切日までに立候補者がなく、執行部は締切
を1ヶ月延期すると同時に北米、カナダ連合
同窓会が小堀さんを推薦するという手を打っ
てきました。そこまで望まれてはJASHとし
ても再考せねばならず、1982年のお正月早々
緊急理事会を開きJASHとして小堀さんを推
薦することになりました。

小堀さんをJASHが推薦するということは
日本が会長国として次期大会開催も含め、全
てを引き受ける覚悟をするということで、こ
れを決断された須賀会長の心の重荷はどれ程
のものであったか、又世界を相手に采配を振
る決意をされた小堀さんの心境はいかばかり
であったかは察するに余りあるものでありま
した。

聖心の卒業生は組織的に動くことには余り
なれておりませんが非常に順応性があり、こ
こぞと云う時には大きな力を発揮します。前
記のAMASC役員招待に関しても実は何ら組
織的に出来たわけではなく各同窓会にかなり
ご無理をお願いして成り立ったものでした。
このような状況下で世界各国からの参加者に
満足して頂けるような大会を開くことなど気
が遠くなるような話でした。サンフランシス
コ大会には、まさに大きな荷物を背にして旅
をする重い気分で開催しました。

それから4年、なりふり構わず会う卒業生
ごとにAMASC大会の話をし、マーク入り商
品を売り、ひたすら宣伝に努めました。しま
いには「何だか判らないけどあなたが一生懸

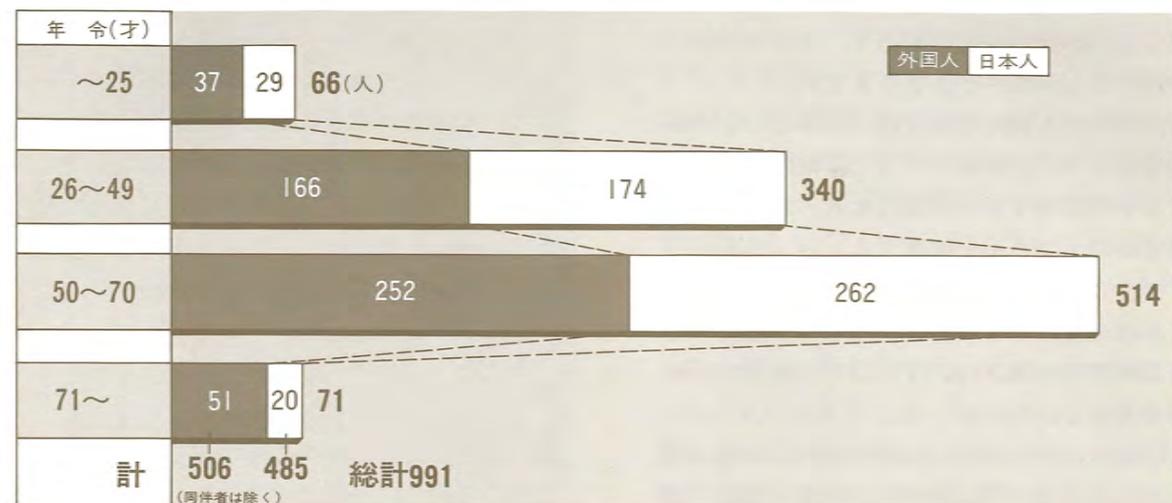
命やってるから応援するわ」と云う友人まで
現れる始末でしたが、それが聖心の特徴の1
つでもあったと思います。AMASCの存在意
義とか日本での開催是非などを越えてあの須
賀さんが決断され、あの小堀さんが引き受け
られたものだから意味があるのだらうと協力
を下さった方が多かったのではないでしょ
うか。これは又、自分から先頭に立ってや
る人は少いが頼まれたらどんな事でも完璧に
こなす卒業生が多いことにもつながると思
いました。

今大会の成果は「聖心」への各自の思いが
1つになって力を結集出来たことに尽きると
思います。これだけ多くの卒業生が一致して
1つの目的に向う中で共に働けたのは幸せで
した。ヨーロッパ勢の反対を押し日本にチャ
ンスを与えようとされたグレイ前会長、全て
の不安と重責を胸に開催国引き受けを決断さ
れた須賀さん、そしてあらゆる困難にも対処
する覚悟で会長指名を受諾された小堀さんに
改めて感謝しております。(宮代会8回)



AMASC東京大会の数字

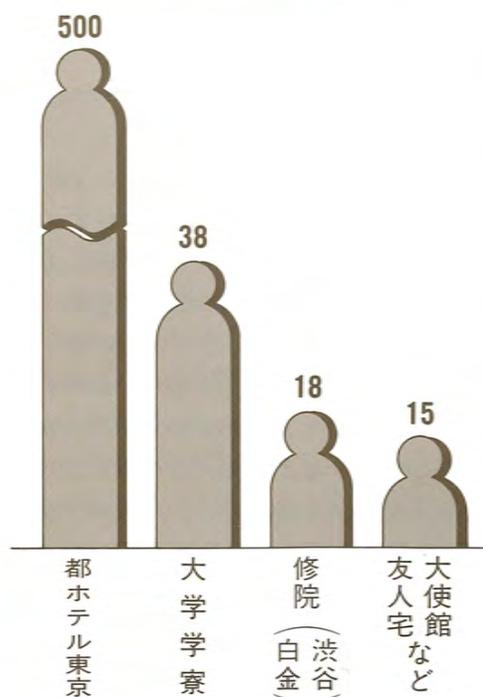
●年齢別参加者数



●今までの開催国名記録

回	国名	年
1	ローマ(イタリア)	1966
2	ブラッセル(ベルギー)	1967
3	マドリッド(スペイン)	1970
4	マヨルカ(スペイン)	1972
5	カミノ・デ・サンタテレサ(メキシコ)	1974
6	ダブリン(アイルランド)	1978
7	サンフランシスコ(合衆国)	1982
8	東京(日本)	1986

●外国人宿泊施設及び人数



●参加国及び人数

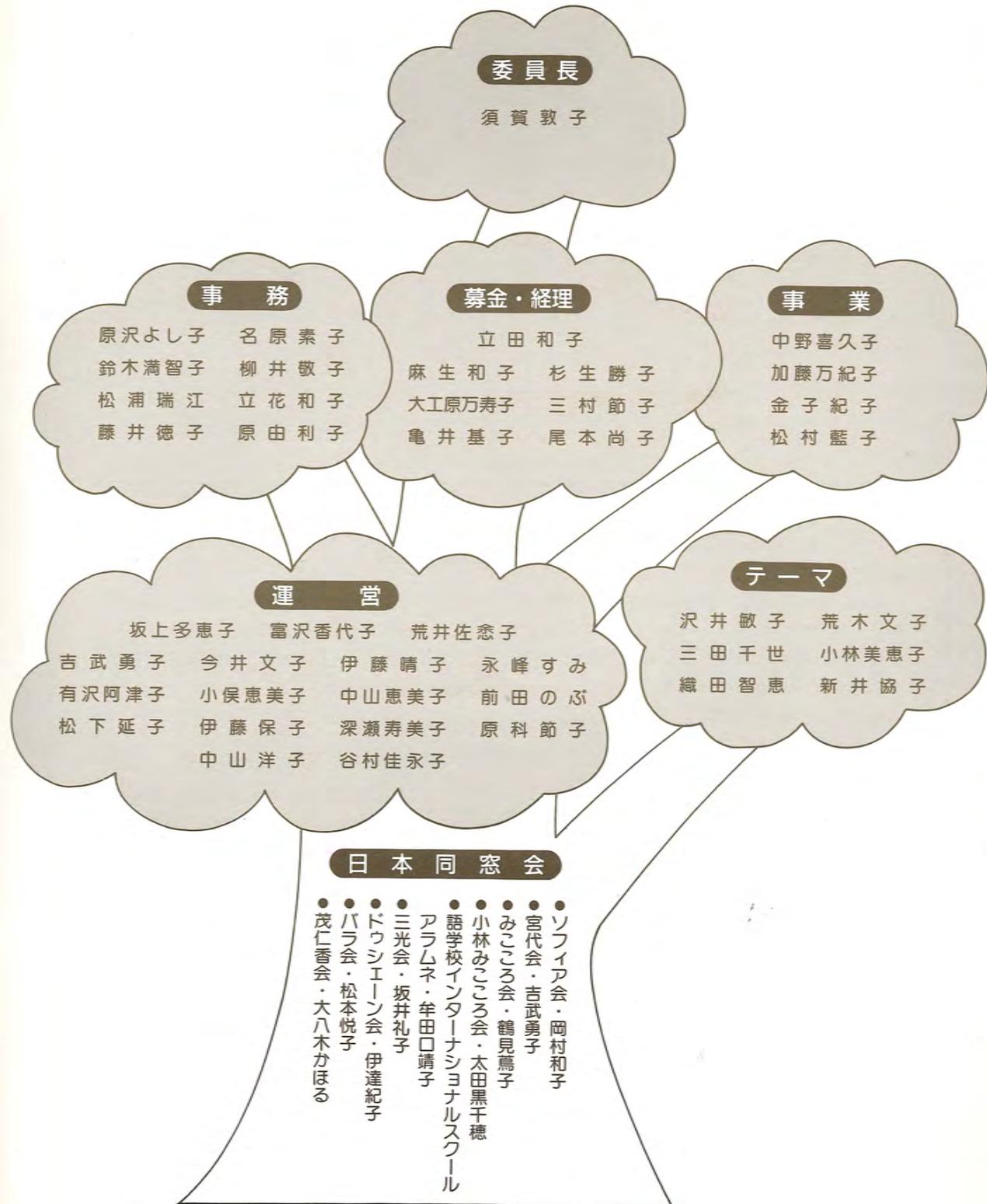
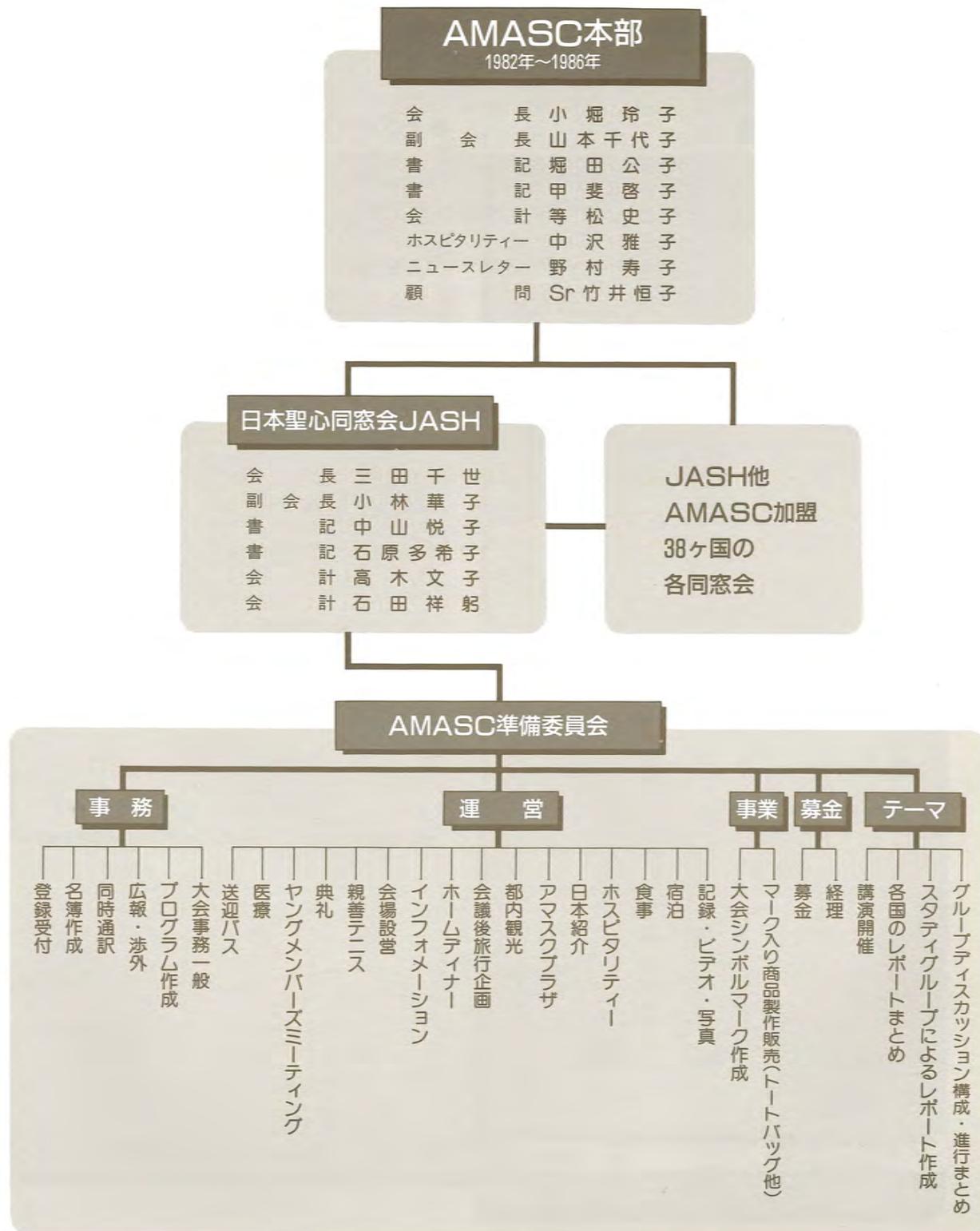
1	オーストラリア	76
2	オーストラリア	5
3	ベルギー	5
4	カナダ	8
5	コロンビア	39
6	キューバ	3
7	エジプト	1
8	イギリス	1
9	フランス	13
10	ドイツ	16
11	オランダ	2
12	ハンガリー	2
13	イタリア	40
14	韓国	3
15	メキシコ	43
16	ニュージーランド	3
17	ペルー	6
18	ポーランド	4
19	スコットランド	3
20	スペイン	118
21	台湾	2
22	アメリカ	110
23	★デンマーク	2
24	★タイ	1
		外国計 506
25	日本	485

★非加盟国

総計 991

●その他(期間中3/16～3/21)

医務室利用者	23名
入れたコーヒー・紅茶	4,000杯
(B4版)印刷枚数	30,000枚
手編みくつ下カバー	630足
外国同窓生同伴家族・友人	62名
パレス訪問者(日本紹介)	1,100名
宮代会館訪問者(華道・茶道・ビデオ)	930名
御ミサ	6回
外国人お招し替えNo.1 (注・これは目撃したメンバーの証言によるノ)	4回/日



編集後記

AMASC東京大会の成果は、同窓生の日々の暮らしの中で、いかにその統一テーマが活かされ培われるかによって、より実り豊かなものになると言えると思います。

東京大会の終了と同時に、この四年間のAMASCメンバーの研究にピリオドが打たれたわけではありません。むしろ、その時から、さらに一歩深く前へ踏み出したこととなります。目立って独自の文化を持つ日本人の私達が、異文化間のコミュニケーションを円滑に行う努力を惜しまず、勇気を持って取り組んで行くことが、東京大会での成果とも言えることだと思っております。

今後JASH (=日本聖心同窓会)としてのAMASCへの関りは、ベテラン (=アマスク会長経験者の就く役職)の小堀玲子さんや、

アドバイザー (=会長の補佐役)の中山洋子さんの御助言や御協力を得て、国際間の友好と平和の確立に同窓生が一致協力して参与するというものです。

ア—アマスクあれこれ編集委員
マ—真面目に取り組む検討会
ス—すっかり忘れた主婦の義務
ク—クリスタルな幸福感
あ—暑さの残る長月以来
れ—連日くぐる宮代の門
こ—こうして迎えた晩秋霜月
れ—運歩の跡を永く残さん

聖心スピリットを受け継ぎ、それを活かしそして伝える。そのスピリットが、広く永く地球上を巡り、異文化間のコミュニケーションを円滑にし、真に平和をもたらすものとなりますように……。

特集にあたりまして、御多忙の中御寄稿下さいました皆様方、また編集に際しまして御指導御協力下さいました皆様方に、厚く御礼申し上げます。尚、紙面の都合によりまして、御寄せ戴いた写真、情報等々、掲載し得なかったものもございました。ここに深くお詫び申し上げます。

編集委員 宮代会22回生有志